失敗だらけの役人人生(5)

黒江哲郎

事態対処　～運用企画局長時代～

続発した中国海軍艦艇によるFCSレーダー照射

民主党政権末期の 2012 年(平成 24 年)9 月に運用企画局長に任命され、部員、課長に次いで防衛省の運用部門において三度目の勤務をすることとなりました。この年 9 月に我が国政府が尖閣諸島を国有化した直後から、これに反発した中国が同島周辺海域における政府公船の活動を活発化させました。さらに、11 月に習近平が正式に最高指導者の座につくと、中国は従来の「韜光養晦」と称される爪を隠して能力を蓄える路線を転換し、国際秩序に対して正面から挑戦する動きを見せるようになりました。12 月 13 日には、前日の北朝鮮による弾道ミサイル発射事件直後のスキを突くようにして、中国海警局の航空機が中国機として初めて尖閣諸島周辺の我が国領海上空に侵入しました。

そうした中、翌 2013 年(平成 25 年)1 月 30 日に東シナ海で中国海軍艦艇を監視していた海上自衛隊の護衛艦「ゆうだち」が、相手の中国艦から FCS(火器管制)レーダーの照射を受けるという事案が発生しました。FCS レーダーは、簡単に言えば火器の照準を定めるためのものであり、たとえ照射する側にその気がなくとも照射された側は攻撃を受けると誤解する恐れが十分にあります。双方が互いの意図を取り違えれば、最悪の場合武力衝突にもつながりかねません。FCS レーダーの照射は、それほど危険なことなのです。

通常、この種の外交問題に発展するような重要な情報は速やかに防衛大臣・総理まで報告されますが、本件はそのようには扱われませんでした。実は、これより 10 日ほど前の 1 月 19 日、同じく東シナ海で中国海軍艦艇を監視していた海上自衛隊のヘリコプターが相手の中国艦から FCS レーダーを照射されたとの報告が上がって来ていたのです。この情報は速やかに防衛大臣・総理まで報告され、防衛大臣が照射の事実を公表して中国に抗議する手はずとなっていました。ところが、直前になって待ったがかかりました。照射された電波の特徴について電波分析の専門部隊が詳細な解析を行ったところ、FCS レーダーのものとは断言できないという結果が出たのです。

この轍を踏みたくないと考えたこともあって、私は護衛艦の件については専門部隊による詳細解析の結果が出てから大臣と総理に報告すべきだと判断しました。ところが、東シナ海で行動していた護衛艦から本土に所在する解析専門部隊までデータを送って解析するのに思っていた以上の時間がかかり、結果が出たのは発生から 6 日も経った後の 2 月 5 日となってしまいました。ともあれ、解析の結果は「クロ」だったので、速やかに防衛大臣及び総理まで報告され、大臣が事実関係を公表し、正式に中国へ抗議しました。

ほろ苦かった予算委員会テレビ中継デビュー

中国に抗議したところまでは良かったのですが、なぜ発生から大臣・総理への報告まで6日もかかったのか、という点がマスコミや国会で追及されることとなってしまいました。確証がつかめるまで大臣や総理への報告を待つように指示したのは局長の私なので、私自身が衆・参両議院の予算委員会で追及されることとなりました。運の悪いことに、これらの委員会は両方とも総理出席で NHK が中継することとなっていたため、私が失態を追及される場面はテレビを通じて全国に流されてしまいました。

事柄の重大性にかんがみれば、詳細は後日改めて報告することとしても、とにかく第一報だけは大臣・総理の耳に入れておくべきだった、というのが追及のポイントでした。その点は野党の追及・指摘の通りで全く弁解の余地はなく、私の予算委員会デビュー戦、テレビ中継デビュー戦はまことに意気上がらないものとなりました。衆議院の審議では、質問に立った野党議員が大臣や総理に対して「(担当局長である私を)叱らないといけない事案だ」と追及しました。この質問に総理が「事務方の気持ちはわかるわけでありますが、…(中略)…確認は別として、まだ未確認ということで今後は私のところに、もちろん防衛大臣のところに上がってくるようにいたします」という優しい答弁をして下さったのがせめてもの救いでした。

速報性と付加価値のバランスの難しさ

最近特に、政治主導でトップダウンの判断が素早くなされる事例が急増しています。役人としてこうした政治のスピード感について行くためには、迅速な報告を心がける必要があります。また、最近のマスコミは危機対応の妥当性を時間で測ろうとする傾向があり、いつ誰が何をやったのか、総理や大臣が報告を受けたのは何時何分だったのか等々に関心が集まり、まさに本件のような遅れがあるとそれは誰の責任だったのかという点が厳しく追及されることとなります。それもあって、役所内ではとるものもとりあえず上司へ速報するという風潮に拍車がかかっているように感じます。速報自体は緊急事態へ迅速に対処するための基本ですし、何かあった時に自分の身を守るアリバイになるという意味でも大切なことだと思います。

しかし、正直に言えば、私自身はこうした「とにかく一報を」という流れにそのまま乗ることにためらいを感じていました。速報ばかりに気をとられていると、情報の信ぴょう性の確認や事態への対応策の検討がどうしてもおろそかになりがちだからです。自分の頭で考えずに情報を下から上へ流すことだけを繰り返していると、十分な材料を整えずに上司に判断を丸投げし、上司の判断に疑問を持たない、疑問があっても議論しないという無責任な態度につながっていきます。

加えて本件については、直前の海自ヘリの件のような「勇み足」をしたくないという意識も強く働きました。このため、私は「情報をそのまま上に伝えるのではなく、情報の信ぴょう性を確認した上で報告すべきだ」と判断したのです。

残念ながら、本件においては信ぴょう性の確認に予想以上に時間がかかったため総理や防衛大臣への報告が遅れてしまい、批判を浴びることとなりました。最低でも一言耳に入れておくべきだったというのはもっともなので、批判は甘受しなければなりません。私自身その点は深く反省しています。

その上で、やはり私は付加価値の大事さを強調したいと思います。安全保障や防衛の問題については最終的に政治の判断が必要となるのはもちろんですが、適切な政治判断のためには様々な判断材料が不可欠です。「言うは易く行うは難し」というところですが、速報することと必要な付加価値をつけることとのバランスをとるように努力することが重要だと思います。

地獄に仏

ところで、このレーダー照射事案の国会審議に関しては余談があります。

本件について私が国会に呼ばれたのは先に述べた衆参予算委員会の二度だけでしたが、このほかに公明党のある先生も関心を持っておられて質問の準備をしておられました。その議員の質問レクに参加した部下が、担当の秘書さんから「報告を遅らせる判断をした担当局長は誰なのか？」と問われ「黒江運用企画局長です」と答えたところ、その秘書さんが急に「え？黒江さん？そうかあ…、黒江さんかあ…、そうかあ…」と逡巡しはじめ、結局質問を取り下げてくれたのだそうです。実はその秘書さんは、私が国会担当審議官だった頃に公明党の国対事務局長を務めておられたのです。そのため、私は頻繁に彼のもとを訪ねて、様々な相談に乗って頂いていました。

防衛問題等についてよく御存知の方だったので、与党として政府を質すのに相応しい論点ではないと判断して質問を取り止められたのかも知れません。しかし私には、昔のよしみから「武士の情け」で質問を控えて下さったものと感じられました。正直「やっちまったぁ」と悔やんでいたところ、文字通り地獄で仏に出会ったようなもので、人脈とは本当にありがたいものだと痛感させられました。

地獄に仏と言えば、たまたま家内が衆議院予算委員会のテレビ中継を見ており、その晩私が帰宅すると「何なの、あの人（質問した野党議員のこと）！？お父さん（私のことです）を叱れとか言って、許せないわっ」とプンプンしていたのです。追及されるようなミスをしたのは私自身なので、客観的に言えば家内の怒りは当を得ていません。しかし、自分の不始末を国会で追及されていささか落ち込んでいた私にとっては、適否はどうであれ力強い励ましとなりました。夫や親が仕事で苦労している姿を間近で見ている家族は、どんな場合でも無条件に味方になってくれるのだということを再認識させられた一件でした。

報道を見ていると、最近の野党は合同で政府追及の場を設けて役人を問い質し、時に罵声を浴びせるようなパフォーマンスをメディアに公開しているようです。立法府と行政府との関係はそういうものなのかも知れませんが、カメラの前で悪しざまに批判さ

れれば本人のみならず家族も耐え難い気持ちになります。「選挙で選ばれた国民の代表者なのだから役人には何を言っても許される」と思われているのなら、また本人やその家族がどう感じるかという点が忘れられているのなら、いささか残念な気がします。

事態対処部門における失敗談については今回で一区切りとします。事態対処においては一瞬の気のゆるみや油断、判断間違いが重大なダメージにつながります。このため、常に緊張感を持続しながら仕事をすることの大切さを学びました。

なお、ここまで色々な失敗談に触れ、これからも様々な経験談をご紹介する予定ですが、それぞれの事例に直接関わった方々もたくさんおられると思います。それらの出来事について私とは違った印象や意見をお持ちの方々もおられると思いますが、この連載はあくまでも私自身の個人的な印象を述べたものだということで御理解いただければ幸いです。

次回からは政策部門での勤務実感などに触れる予定ですが、事態対処部門とはまた違った学びがありましたので、そのあたりをお伝えできればと思います。